

# SHOW HEY シネマール

★★★

## ヘカテ

デジタル・リマスター版

1982年/スイス・フランス映画  
配給：コピアポア・フィルム/108分

2021 (令和3) 年7月23日鑑賞

テアトル梅田

### Data

監督：ダニエル・シュミット

脚本：パスカル・ジャルダン/ダニエル・シュミット

原作：ポール・モラン『ヘカテとその犬たち』

出演：ベルナル・ジロドー/ローレン・ハットン/ジャン・ブイズ/ジャン＝ピエール・カルフォン/ジュリエット・ブラシュ

## ■■■ショートコメント■■■

◆『ヘカテ』ってナニ？何のことかさっぱりわからないこのタイトルは、ギリシャ神話の女神の名前だ。Wikipediaによると、ヘカテは「死の女神」、「女魔術師の保護者」、「霊の先導者」、「ラミアーの母」、「死者達の王女」、「無敵の女王」等の別名で呼ばれ、トリカブトや犬、狼、牝馬、蛇（不死の象徴）、松明（月光の象徴）、ナイフ（助産術の象徴）、窪みのある自然石等がヘカテの象徴とされるらしい。しかし、本作は、そんなヘカテのような美しい人妻、クロチルドのファム・ファタールぶりを描く物語だ。

「ファム・ファタール」とは、フランス語で男にとっての「運命の女」、「男を破滅させる魔性の女」を意味するもの。映画におけるその典型は、私見では『氷の微笑』（92年）でシャロン・ストーンが演じた女だが、本作のファム・ファタールは、俳優としての活動のほか、「ヴォーグ」誌専属のモデルとしても有名で、2018年には史上最年長の73歳で同誌の表紙を飾るなど、生涯現役のモデルとして活躍を続けているローレン・ハットン。

チラシにはそんな彼女の刺激的な肢体が写っている上、予告編でもそれが強調されていたから、これは必見！

◆本作の原作は、外交官であり、第二次大戦後の亡命先のスイスでココ・シャネルの伝記も執筆した、戦間期の文壇の寵児ポール・モランの小説『ヘカテとその犬たち』。本作冒頭は、第二次世界大戦中の中立国スイスの首都ベルンで開かれているフランス大使館主催の豪華絢爛なパーティーの会場で、外交官の男ジュリアンが物思いにふけているシークエンスから始まる。その追憶の相手は、約10年前、赴任した北アフリカの植民地で出会い、狂ったように愛した謎のアメリカ人妻クロチルドだ。

そんな導入部を経て、時代は一気に10年前にさかのぼり、白いスーツ姿で北アフリカの植民地に赴任したフランス人の外交官ジュリアン・ロシェル（ベルナル・ジロドー）が、あるパーティーではじめてクロチルド（ローレン・ハットン）に出会い、一目で惹かれていくシークエンスが描かれる。ジュリアンの最初の任地が最悪に近い北アフリカにな

ったのは、きっと彼の成績があまり良くなかったためだろう。着任するなり、住居、オフィス、秘書、家具等すべての準備が整っているにもかかわらず、「足りないのは情婦（愛人）だけ」と語っているジュリアンの姿を見ていると、この男はホントに仕事をする気はあるの？そんな疑問が湧いてくるが・・・。

◆アメリカ人女性であるクロチルドがなぜ北アフリカのフランスの植民地に1人でのいるの？それを巡っているいろいろな噂があったのは当然。また、着任早々のジュリアンがクロチルドと付き合っているらしい、という噂もすぐに広まったが、クロチルドは一体何者？知り合ってからすぐに“いい関係”になったことからわかるように、クロチルドはジュリアンにとって“便利な女”だが、クロチルドの“秘密性”は高かったらしい。クロチルドの夫は軍人で、今はシベリアに赴いているそうだが、それは一体なぜ？また、クロチルドはほぼいつでもジュリアンの“お相手”をしてくれているようだが、地元の子供たちと何かやばいことをしているの・・・？

ジュリアンは何度もクロチルドに対して、「君は何者だ？」と質問していたが、それに対するクロチルドの答えは「私はあなたの望む女だ」と答えるだけ。たしかに“愛人”としての彼女の美貌とセックスは申し分のないもの。それなら、ジュリアンはそれで十分満足すべきでは？私はそう思うのだが、ジュリアンはクロチルドの秘密性が深まれば深まるほどそれを知りたくなっていったため、イライラ、カリカリが次第に高まっていくことに。そうすると、もはや外交官の仕事も手につかなくなり、無断欠勤が続く状態に。こりゃダメだ。エリート外交官のバカさ加減が、丸出しに・・・。

◆本作は、出会った直後からすぐに“いい仲”になった美男美女に何か一波動が起こりそう。そんな展開を誰もが期待するはずだ。ところが、本作はジュリアンがクロチルドの秘密性（＝ファム・ファタール性）を探ることに夢中になる中で、勝手に消耗し、勝手に破滅に向かっていく姿を描くだけだから、途中から少し飽きてくる。

クロチルドの美しさはずっと続いているし、セックスシーンも魅力的だが、あっと驚くベッドシーンがあるわけではないから、面白いストーリー展開がなければ、飽きてくるのは当然だ。そんな展開の中、とうとうジュリアンは本国に召喚されてしまったから、これにて、ジュリアンとクロチルドとの関係も、ジュリアンの外交官としての人生もジ・エンド・・・？

◆そう思ったが、本国に戻り外交官として平凡な仕事を続けていると、ジュリアンは少しずつ出世していったから、アレレ。いったん外交官になってしまうと、競争のない社会では何とかなるらしい。もっとも、そんな体たらくだから、第二次世界大戦以降、フランスの国力はガタ落ちになっていったのかも・・・。

それはともかく、その結果、ジュリアンは「スイスのベルンに行くか、それともシベリアに行くか」という二者選択権が与えられたからビックリ。さらに、そこでジュリアンがシベリア行きを選択した結果、ラストに向けて思わぬ“男同士のご対面”が実現し、一波

乱起こるかも？そう思っていたが、アレ・・・。

本作ラストは、それなりに出世したジュリアンが、黒いスーツ姿で登場し、黒いドレス姿のクロチルドとベルリンで再会するシークエンスになるが、それは現実？それともジュリアンの幻想？導入部でも白いスーツ姿と白いドレス姿での初対面が印象的だったが、そんなシークエンスと、このラストの黒服同士のご対面シーンを比較すれば興味深い。しかし、他方でこの10年間、ジュリアンという外交官は一体どんな仕事をし、どんな成長をしたの？それが大きな疑問だ。

本作には期待していただけに、鑑賞後の失望感も大きいものに。

2021（令和3）年7月28日記